

狩人がいない世界

24代目イエヤス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

西暦2023年 日本

かつては、「モンスター」と「狩人」が存在した世界。

文化も発展し、次第にモンスターも狩人も記憶と共に消え失せていった。

しかし、東京にて大昔に存在していたモンスター達が多数目撃される。

狩人が存在しない世界。そんな世界で、モンスターは本能のままに生き始める。

※モンスターが現代にいたら：そう思って描いた作品です。

無茶苦茶な部分があるかと思いますが、暇潰し程度に見てもらえれば幸いです。

続編はこちら←

<https://syosetu.org/?mode=ss&detail&nid=254140>

目次

『襲来』	1
『氷牙』	5
『飢餓』	10
『水異』	15
『侵蝕』	20
『風炎』	25
『終始』	29
『終焉』	35

『襲来』

2023年 日本

夜の東京。

ビルが立ち並び、家路につく者達で溢れかえる平日の街。

皆、何気無い日常を送っている。それが幸せかどうかは人それぞれだが、何もない事が一番幸せなのかもしれない。

バイト帰りの大学生 『井高 美優』

茶髪をポニーテールに束ね、暗闇に溶け込む瞳を持つ。

勢いで一人暮らしを始めた所までは良かったが、それが楽では無いことに気が付き始めている。

「ああ…肩が重い。」

重りが乗ったように重たい肩を回してほぐしながら、建物の明かりや街灯の光で照らされた薄暗い道を歩く。

そんな薄暗い夜道に、やけに明るく、丸い物体が、ふわふわと浮いているのが目についた。

「ん…なんだろうあれ。ホタル?」

まるでホタルのように点滅を繰り返しながら浮遊している。

だが、こんな町中にホタルなどあり得ない。

きつと疲れているのだろうと、自分を誤魔化し、さっさと家に帰って休もうと決めた。

彼女も、そして周りの人間も、気づいていない。

これが、何気無い日常の——終焉だと。

「喉乾いちちゃったな。」

自販機を見かけて、商品を眺める。

缶コーヒーを購入し、蓋を開けて少し口に含む。

程よく苦い味が広がり、温かい液体が喉を通る。

帰宅するサラリーマンが多く、車も突然よく通っていた。

あの光る物体が、やけに増え始める。

それは、周りの人にも見えているようだ。

「ガオオオオオオオオオオオン!!」

獣のような雄叫びが、街中に響いた。

美優だけでは無く、周りの人々にもハッキリ聞こえたようだ。

「なんだ?」「誰だよ。」「こんな時間に何かのイベント?」

そんな会話が聞こえてくる。

しばらくの静寂の後、それは起こった。

突然、上空から巨大な獣が降ってきた。

水色の鱗を主体とし、金色の甲殻を四脚と、胸元から尻尾までに纏い、背中にはびっしりと白い毛が生えていた。

2本の角を持つ狼のような獣は、地面に着地するや否や、またあの咆哮を轟かせた。

「ガオオオオオオオオオオオン!!」

天に向かって吠えるその姿は、まるで狩りをする直前の一匹狼のようだった。

怯える人がいれば、呑気に写真を撮る者もいる。

そんな人々を待たずに、その獣は尻尾を振り回す。

近距離で写真を撮っていた人達は吹き飛ばされたり、運が悪い人は身体が真っ二つにされていた。

それを見て、皆一斉に逃げ惑う。

「にっ…逃げないと…い」

美優も例外では無い。

大きな狼が天に向かって吠えれば、青い雷が辺り一帯に迸った。

雷に打たれた街灯が発火し、周りは炎の海に吞まれた。

走行中の車も、混乱して転倒したり、ぶつかったりして大事故を起こしていた。

まさにその光景は、地獄絵図に等しいだろう。

「何処にも逃げれないじゃない…い」

「そこのお嬢さん…こっちだ!」

男性の必死になる声が聞こえ、振り向くと、ビルの中から上半身を

覗かせる男がいた。

男に導かれ、美優はビルの中にスライディングして入る。

「良かった…あの化け物に気づかれなくて。」

「何なんですか？あの化け物…なんて言っても、誰も分からないですよね。」

ビルの中には、数人の生き延びた人が身を潜めていた。

男性は、少し汚れたスーツを着て、清楚感ある黒髪に明るい茶色の目を持っていた。

「俺、『裕二』って言います。」

「美優です。」

裕二は名だけを名乗った。

「あの怪物は、しばらくあそこに留まるつもりらしいです…迂闊に出ても、逃げる場所も塞がれてますし、救助を待つのが妥当かと。」

裕二はこれからの行動を丁寧に話してくれた。

「な、なら屋上上がった方がいいのでは？救助は、きつとへりで来てくれると思いますし…」

気弱そうな黒髪ロングの女が言う。

今の時代、災害等が起こった時の救助作業の大半がへりで行われる。

「…崩れないか心配ですが、ここにいっても外の煙にやられるだけです。なので、そうした方が良さそうです。皆さん、落ち着いて上に行きましょう。」

裕二は人々を誘導する。

こんな時に落ち着いて指揮を取れる人間は早々いないだろう。

だが、脅威はビルの中にも迫っていた。

「なっ…なんだこいつ…うっ…うわああああ！」

「ギャア！ギャア！」

今度は恐竜のような鳴き声と共に、悲鳴が響き渡る。

階段から姿を現したのは、黒の班模様で飾られた、朱色の皮で身を包んだ小さな恐竜だった。

裕二は持っていた革力バンで恐竜の頭を殴り、怯ませた。

「今のうちです！皆さん上へ！」

恐竜が頭をふらつかせている間に、人々は一斉に上へ上がって行く。

途中、男性の死体があったが、構わず上へ上がる。

しかし、その恐竜は他にも多数存在しており、次々に人々へ襲いかかった。

「美優さん、こちらに。」

裕二は美優を引っ張り、デスクの影に隠れる。

影から覗いてみれば、4体の恐竜と、1体のトサカを持つリーダーらしき恐竜、計5体が部屋を彷徨っている。

「何かで気をそらせれば……」

「あ、そういえば……」

美優はポケットの中から防犯ブザーを取り出した。

過保護な母がくれた物だ。もう必要ないと思っていたが、こんな所で使うとは思ってもいなかった。

投げる寸前で防犯ブザーを鳴らし、できる限り遠くに投げる。

見事成功し、恐竜達はブザーの方へまっしぐらだ。

部屋から脱出する直前、トサカを持った恐竜がこちらに気づき、口から紫の毒々しい液体を吐き出した。

裕二はそれをもろに浴びてしまう。

「裕二さん!!」

「行こう！早く！」

2人は大急ぎで屋上へ駆け上がる。

「いたぞ！生存者だ！」

あの女性の言った通り、救助へりが屋上に到着していた。

雷鳴が走る夜空を、へりに乗って颯爽と通り抜けた。

『氷牙』

東京に突如出現したあの怪物。

あれは、太古に存在していた“モンスター”と呼ばれる種族だという事が発覚した。

かつて、この世界には“狩人”と呼ばれる人間と“モンスター”が存在したと言われている。

狩人はモンスターを狩り、その恩恵を受けながら生活していたようだ。

だが、今やその狩人は存在せず、狩人が使っていたと呼ばれる武器も使い物にならない。

モンスターの大半が都市部や住宅街などに神出鬼没のため、空軍も役に立たない。

頼れるのは、自衛隊だけだった。

当然、市民達は逃げ惑う事しかできない。

奴らにとっては、ただの獲物、もしくは縄張りの侵入者なのだから。

『続いてのニュースです。東京都に出没した怪物は、太古に存在していた、“モンスター”と呼ばれる種族だと言うことが判明しました。』

新潟県の住宅街にある、何の変哲も無い一軒家。

3人の家族と一匹の犬が暮らす家に、物騒な話題を報道するニュースが流れていた。

「信じられないわね。本当なのかしら？」

「信じるしかないだろう。あれだけ被害が出てるんだ。」

ダイニングテーブルのイスに座る母親と父親らしき人物が朝食を取りながら会話をしていた。

「おはよう…」

栗色の髪をボサボサにしたショートヘアの少女が、階段を通じてリビングへ降りてきた。

「由衣。おはよう。」

「ちよっと寝すぎじゃない？」

『仁雨 由衣』14歳の中学生で、少し天然な可憐な少女である。

「何これ、何かの映画？」

テレビに映るモンスターの映像を見て、彼女は何かの映画かと勘違いする。

「違うらしいわよ。東京にこんな怪物が出たらしいの。」

「今日、勉強会をしに行くんだらう？東京といえは近いし、気をつけるんだぞ。」

「ん〜大丈夫大丈夫。こんななたまたまだよ。多分。」

少女はパンを頬張りながら言った。

テレビだけで見せられては、信用できる筈があるまい。

今やCGや合成など、技術とデバイスさえ持っていれば簡単にできる時代だ。

「じゃあね、気をつけて行ってくるのよ。」

「分かっているって、お母さんは心配症なのよ。」

由衣は笑いながら外へ出た。

テスト期間も近々やってくる。そのため、真面目な彼女は友達を集め、近所の図書館で勉強会を開く事にしたのだ。

主催者が自分なだけあって、かなり張り切っており、お気に入りのメガネも持ってきた。

そんなウキウキな気分が、モンスターの事なんぞ気にさせなかった。

「へつくしー…うくん。まだ冬でも無いのに肌寒いなあ。」

寒さにはとうの昔に慣れてはいたが、8月になっても 寒いのは少し勘弁だった。

肌を擦りながら、由衣は図書館へ向かった。

「うわ〜ん！痛いよおー！」

道路で転んで泣き叫ぶ幼い少女が目に入った。

膝を擦りむいている、小さい頃ならではの怪我である。

幼い頃の由衣もしょっちゅう転んではギャン泣きだったと母が笑いながら話してきたのを思い出した。

よく父がくれた言葉は「よし！生きてる生きてる！転んで泣くのも、人生の一部！生きてる証拠だ！」

と、幼い子供に対して少々大げさな言葉だった。

「よし。生きてる。転んで泣くのも、人生の一部だぞ。君が、生きてる証拠だよ。」

よく生きたね、偉い、偉いよ。」

少女の頭を撫でながら、擦りむいた痛々しい膝に絆創膏を貼ってあげた。

「生きてるしよーこ…？」

「うん。泣いたり、笑ったりできるのも、生きてるからなんだよ。」

「じゃあ、生きてなかったら、笑えないの？」

「えっと…それは…えっとお〜」

正しい回答を追い求めるあまり、言葉が詰まってしまいう由衣。

「グオオオオオオオオオ」

突如、耳に響く、低い咆哮が遠くの方からした。

「え…嘘…でしょ…」

遠くに見えるのは、白くて動く、大きな生き物。

白い甲殻で身を包み、翼脚には橙色の棘が生えており、橙色の大きな2本の牙から、とてつもない威圧感が放たれていた。

彼女は知らない、このモンスターが「ベリオロス」という名だと言うのを。

「に、逃げよう！」

少女を抱きかかえ、自宅のある方へと走る由衣。

だが、そう上手くいくはずもない。

「ギヤアアアアアアアアアアアアアア!!」

今度は耳を劈くような咆哮が響き、目の前をしてみる。

青白く見るからにブヨブヨした皮、2枚の大きな翼、長い首の先端

にある頭部らしき部位に目は無く、大きな口だけがあった。

このモンスターは“フルフル”、だとしても、今の彼女には関係なかった。

「お姉ちゃん…怖いよ。」

「だ、大丈夫！私が…私がちゃんと生きて帰してあげるから！」

由衣は近くの塀を乗り越え、他人の敷地内に入ってしまったが、すぐに裏へ周り、奴らの死角に隠れながら走った。

しかし、ベリオロスが翼を羽ばたかせながら上空から氷の塊を放ってきた。

幸いにも足の速さに自信があつたが、その塊は地面に衝突すると、小規模な竜巻を引き起こすのだ。

それでも全力疾走し、角を曲がり、急いで自宅へ逃げ込んだ。

誰もいない。あのブヨブヨしたモンスターに怯えて、皆逃げてしまったのだろうか。

落ち着いて少女を下ろし、外の様子を確認するべく、リビングの窓から外を覗く。

すると、さっきのフルフルが、すぐそこにいた。

目が無いため、由衣の姿を目視できないだろうが、音を立てれば確実にバレるだろう。

しばらく息を殺していると、モンスターは何処かへと去つていった。

「はあ…怖かった…」

由衣は少女に寄り添うと、優しく頭を撫でる。

「大丈夫だよ。私が必ず、お母さん達の所に連れて行ってあげるからね。」

——突然、屋根を突き破り、ベリオロスが家の中へ侵入してきた。

それにより家の半分が倒壊し、瓦礫の雨が降り注ぐ。

悲鳴を上げるも、2人は瓦礫の下敷きとなってしまう。

薄れる意識の中、見たのは最期に相応しくない光景だった。

ベリオロスと、フルフルが争いあっている。

フルフルが牙のベリオロスに巻き付く、しかし、鋭い牙でその長い首へ噛みつかれ、投げ飛ばされてしまう。

フルフルが投げ飛ばされたことにより、多くの民家が倒壊している。

それに構わず、ベリオロスはフルフルに追撃をするため飛び上がり、一気に急降下し、その鋭い爪を地面に叩きつけた。

「お姉ちゃん、あたし、死んじゃうの?」

「もう、生きれないの?」

「ごめん…ごめんね…」

誰も悪くない。

彼女は自然の摂理を、ようやく理解する事ができたのだった。

『ベリオロス、と古代から名付けられているモンスターは今も尚、新潟県の住宅街に滞在しており——』

崩れた瓦礫に埋もれるテレビ、まだ辛うじて電源が付いている画面から流れるニュースに映っていたのは、崩壊した住宅街を徘徊するベリオロスの姿だった。

8月にも関わらず、雪が降っている。

上空に謎の影が通り過ぎる。翼を持った一体の龍、雪によって曇った空、奴の姿はあまり見えない。

もう人がいない住宅街、ベリオロスと、あの龍が築いていく、新たな地が誕生しようとしていた。

『飢餓』

近々、海外では、『古龍』と呼ばれる強大な力を持つモンスター達が目撃されているらしい。

破壊の限りを尽くし、瞬く間に旋風で大地を裂き、一面を紅き炎で包む——そのような力を持つモンスターにより、日本以外の国はほぼ壊滅状態だという。

海外を一瞬で滅ぼす古龍が、日本に来たらどうなるか、誰も想像したくはあるまい。

各地に広がるモンスターの被害を防ぐ為、国は警戒を呼びかけてはいるが……

大阪府にある大型のテーマパーク『プレザントパラダイス』

休日は、当然、多くの客で賑わっていた。

近畿地方にはモンスターの目撃例は無いため、誰も警戒心が足りないのだろう。

「次、どこ行く?」

「そうだなあ、さっきのはちよつと激しかったし、ゆつくりなのに行きたいな。」

ここに遊びに来ているカップル『彰』と『マユ』

2人っきりのテーマパークは、最高に楽しかった。

彰は黒髪をショートに整え、軽くパーマさせ、マユは黒髪ロングを靡かせている。

「うくん、やっぱりお腹空いちやった。何か食べようよ。」

「ははは、じゃあお昼にするか。」

パーク内にある飲食店を目指して、2人は手を繋いで歩く。

ここにはやはりカップルは多い、家族連れや友達連れでも賑わっているが、カップルにも人気なスポットだ。

ここで正式に付き合い始める者も多いらしい。

「どれにする?」

「俺は、そうだな、じゃあこのハンバーガーにしようかな。」

「私はこのハンバーガーで。お金出そうか？」

「いやいや、ここは俺が奢るよ。」

カッコつけて中々に高額なハンバーガー2つを奢った彰。

だが、今日の夕方、彼は彼女に思いを伝える事を決めていた。好感度を得る為なら、多少の金を使う事はできた。

「ねえ、最近こんなニューズ多いよね。」

マユが見せたスマホに映し出されたのは、モンスター関連のニューズだった。

ニューズサイトはモンスター関連だらけ、最初はデマだと思っただが、ここまで来ると信じざるを得なくなってくる。

「信じられないけどな、本当らしい。」

「怖い…こんな化け物に食べられて死ぬなんて、私嫌だよ。」

「大丈夫だよ。俺が守ってあげるよ。」

「あ、その言葉、信じるからね。」

そんな事を言っけていても、まだ信じ切っけてはいなかった。

そうこうしている内に、注文したハンバーガーがテーブルに届けられた。

彰のはハンバーグが3枚も挟まれた贅沢で、ジューシーな物、マユの物は種類豊富な具材が沢山挟まれたハンバーガーだ。

「わく、美味しそう！」

「これは金払った甲斐があるなあ！」

2人はそれぞれのハンバーガーにかじりつく。

その匂いに誘われ、招かれざる客が、このテーマパークへやってきてしまったようだ。

ハンバーガーを平らげた後、次に行く場所を決めていた。夕方まで後少し、いい時間潰しになる所を選ばなければならなかった。

すると、広場辺りが突然騒がしくなってきた。

「なんだろう。何かイベントがあるのかな。」
何かのイベントにしては、ざわめきが不穏な空気だった。

広場に行ってみると、地揺れが起こっていた。

イベントで地揺れ、随分と手が凝って、誤解を招きやすい物だった。
段々と地揺れは大きくなっていき、中心の噴水が盛り上がり、地面が割れた。

そこから出てきたのは、モンスターだった。

口元まで裂けた巨大な口、それに相応しい巨体を持ち、黄土色の皮で見を包んだ恐竜に非常に似たモンスターだ。背中が赤く変色し、口から涎を滝のように流すそのモンスターの名を「イビルジョー」と言うことは、誰も知らないであろう。

それも、「怒り喰らう」イビルジョーである事を――

イビルジョーは目の前にいた写真を撮る男性に目をつけ、即座に頭から喰らいついた。

口の中で噛み砕く度にグロテスクな音がする。

飲み込むと、飢えたイビルジョーは次々に人々を襲い始めた。

「あ、彰……」

「逃げるぞー・マユー……」

マユの手を引いて、彰は走る。

複数の自衛隊員達が、新型のアサルトライフルを手にしてイビルジョーへと駆ける。

黒のヘルメット、黒の戦闘服に身を包んだ彼らの銃口が一斉にイビルジョーの元へと向き、弾丸が放たれる。

対モンスター用に即座に改良されたアサルトライフル、効かない筈が無かった。

だが、その弾丸を気にも止めずイビルジョーは隊員達をも喰らう。
楽しいテーマパークが、紅に染まっていく。

「あそこに隠れようー」

さつきまで入っていたレストランへと駆け込んだ。

一瞬だけ動いた物が見えたイビルジョーは、レストランを覗いてみ

る。

カウンターの後ろに隠れて、必死に息を殺す二人。
イビルジョーは首を傾げて、何処かへと去っていく。

「うう…怖いよ…彰…」

マユは泣きそうになりながら彰に寄り添った。

「大丈夫だ…一緒に、必ず一緒に生きて帰ろう。」

彰はマユを抱きしめて、背中をさすった。

落ち着いた二人は、立ち上がり、ここからの脱出を図る。

しかし、目の前にいたのは、トカゲのようなトサカを持つ、紫と白の皮で身を包んだモンスター——「ドスジャギイ」だった。

「クウオンオンオンオンオオオオオオン」

雄叫びを上げる。仲間を呼んだようにも捉えられる。

彰は近くにあつたイスを手に持ち、ドスジャギイの頭部へと思い切り叩きつけた。

「マユ…こっちだ！」

ドスジャギイが怯んでいるうちに、マユを誘導し、レストランを出た。

しかし、その外には小型のモンスター「ジャギイ」達が待機していた。

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオ」

イビルジョーがどこからともなくすっ飛んできて、レストランを踏み潰し、ドスジャギイを啜える。

地面に何度も叩きつけ、絶命させる。

「今のうちだ！逃げよう！」

日が沈む夕暮れ時、地獄のような場所を潜り抜けて、全力で出口へ向かった。

もう、何も追ってこなかった。

彼はポケットから指輪ケースを取り出す。

「俺…夕方、ここでお前にプロポーズするって決めてた。」
「お前を愛してる、だから、結婚してくれ。」

「彰…」

マユは泣きそうになった。

恐怖からでは無く、嬉しいからだ。

涙を零しながら、指輪を受け取り、彰に抱きついた。

沈みゆく太陽は、二人の時間を長く感じさせていた。

「やつ…やめろ!!うわあああ!!」

テーマパークの獲物を喰らい尽くしたイビルジョーは、大阪府の街へと侵入していた。

逃げ惑う人々を喰らい、その者が建物に入ろう物なら容赦無く破壊し、喰らった。

満たされる事の無い奴の飢餓は、一夜にして、府の殆どを壊滅へと導いた。

『水異』

海外では着々と、国々がモンスター之地と化してきている。

日本は、怒り喰らうイビルジョーにより、大阪府が壊滅的な被害を受けた。

だいたいのモンスターが、しばらく街を蹂躪した後どこかへ姿を消したり、その場に滞在し続けている。

いつどこで、どんなモンスターに襲われるか分からない恐怖に怯えながら生活する事を余儀なくされている。

これを受けて、政府は自衛隊を対モンスター組織

『イレギオンズ』へと改名し、技術を注ぎ込んだ。

『続いてのニュースです。各地のモンスターによる被害は拡大しており、先日、『イビルジョー』と呼ばれるモンスターが、大阪府に壊滅的な被害を齎しました。』

「大阪：すぐ近くじゃねえか…」

滋賀県 琵琶湖に限りなく近い場所で家族と暮らす中学生、『風春かぜはる龍太りゅうた』は自分の部屋でニュースを見ながら驚愕していた。

中学生、といえば、何でも自分でできると思う時代、思春期真っ盛り、親には平気で反抗し、何でも一人でやり遂げようとする。

典型的な男子中学生だ。

髪は流行りの男らしい髪型に整えている。

今日も窓から琵琶湖が見える、初めて見た時は何故こんなにも大きいのだろうかと思ったが、成長するに連れ、そんな疑問も無くなっていった。

「あそこからモンスター来たりしないよな…ま、流石にある訳ないか…」

冗談じみた事を言いながら、スマホをいじり始める。

ニュースアプリを開いてみれば、一面モンスターについてのニュースばかり。

どれだけ国民を不安にさせたいのか、それとも常に報道して国民に

危機感を持つてほしいのか分からないくらい、ここ最近そんなニュースばかりだ。

「モンスター…ね。大阪にも現れたとなれば、ここもそろそろ危ないんじゃないか…?」

危機感を持つため、モンスターについて勉強する事にした。

最近、様々なモンスターの生態や名前などが載せられたサイトが存在する。

そのサイトを開いてみる。

目に入ったのは、最も現れやすいモンスターだった。

ランポス、ゲネポス、イーオス、ギアノス、ジャギイ、ジャグラス

——どれも共通するのは、小型の恐竜のような姿をしている事だ。

「集団で襲ってくるのか、恐ろしい奴らだな。」

続いて、危険なモンスター——大型モンスターに属される者達。

真っ先に目に止まったのは、『ラギアクルス』や『ガノトトス』というモンスター達だった。

どちらも、水辺によく現れるようだ。

「こんな奴らが琵琶湖から出てきたら…俺耐えられねえよ…」

どちらも危険なモンスターであり、遭遇したらひとたまりもない相手だ。

「…なんだよ、こちとら対処法が知りたいのに、どこでも」とにかく逃げましょう”しか書いてないじゃねえか。」

確かに、逃げるのが一番の手だ。

だが彼が知りたかったのは、より安全な対処法だ。

モンスターの生態や特徴を理解し、それに応じた対応、それを求めていたが、どうやら彼の要望には答えてくれなかったようだ。

——すると、琵琶湖辺りからとつもない轟音が鳴り響いた。

「な、何だ?!」

龍太は窓から首を最大限まで出して琵琶湖を見た。

雨のような水しぶきが上がり、地面に幾つも打ち付けられた。

『グオオオオオオオオオオオオオオ』

琵琶湖から飛び出て、道路に着地したのは、青い甲殻と白い革が目立つ首の長い竜。背中には無数の突起物があった。

「ら、ラギアクルス…」

スマホで見た、ラギアクルスそのものだった。

「だ、大丈夫…家の中であいつにバレないようにすれば、きっと大丈夫だ…」

窓から離れ、ラギアクルスに見られないよう必死に隠れた。

次に響き渡るのは、またラギアクルスの咆哮。

咆哮と共に放たれた雷の球体は、奴の周りを浮遊しながら、辺りの建物を破壊する。

そして、龍太の家の前で止まったラギアクルスは、尻尾で家を破壊した。

「うっ…うっおおお!!」

崩れた衝撃で地面に仰向けになる龍太。

瓦礫に塗れて姿は見えずに済んだが、目の前に横たわるのは、母親の死体だった。

「龍太、これ新しい服買ったけど…」

「いらねえよ!こんなダセエ服!」

数々の記憶が、一気に蘇ってきた。

今まで邪魔だと思っていた母親が本当に死んだ。

彼にとつては凄く複雑な気分だった。

「母…さん。」

衝動で立ち上がってしまった。

ラギアクルスに気づかれ、蒼き落雷が落ちる。

龍太は焦って回避し、全速力で路地裏に逃げた。

ラギアクルスが放つ落雷が、彼の足跡のようになる。

路地裏から抜け出した直後に、ラギアクルスが放つ渾身の落雷が彼の頬スレスレを通る。

速まる鼓動を抑えながら、とにかく逃げる。奴に見つからない場所

へ。

「モンスターを発見、排除を試みます。」

イレギオンズが到着した。

さらにモンスター用へと改造された “キラーアサルト” を構え、一斉に弾丸を放った。

前のアサルトライフルより効果があるように見られる、それも一斉放火、飛び散る血液でその効果は分かる。

しかし、ラギアクルスもただ撃たれるだけでは無く、尻尾を振り回し、イレギオンズを吹き飛ばす。

吹き飛ばされた衝撃で、何人かが命を落としてしまい、負傷者も出ている。

もう長く居られないと思った龍太はその場を離れた。

「クソツ…クソツ!!」

ただただ、日常を得体の知れない物に奪われた事を悔やんだ。

そして、大嫌いだっただの母親が死んだ事を悲しんでいる自分に、ひたすら動揺した。

日常が壊れるとは、こういう事なのだ、実感する。

「な、何かが凄く速さで動いてるぞ!!」

周りにいた市民の一人が叫んだ。

“グルアアアアアアアアアアア”

獣の叫びと共に、道路へ降り立ったモンスターがいた。

青い体毛で覆われ、猫のような耳を持ち、棘が生えた尻尾を威嚇の如く振り回すモンスター “ナルガクルガ” だった。

ナルガクルガは市民を押し倒し、首元に噛み付いてそのまま首を引きちぎった。

それを見た市民達はますます混乱し、逃げ惑う。

“グオオオオオオオオオオオオオオオオ”

騒ぎを嗅ぎつけたようにラギアクルスもやってきて、ナルガクルガに雷を放った。

ナルガクルガも負けじと尻尾を振り回し、周りの建物を巻き込みながらラギアクルスに反撃する。

ラギアクルスは長い身体を活かし、ナルガクルガに巻き付いてから首元にかじりつく。

痛がるナルガクルガは暴れまわり、さらに建物が倒壊していく。

「市民を発見。救助を優先する。」

「皆さんーこつちですーこの車に落ち着いて乗ってくださいー！」

イレギオンズの避難用の車が数台到着した。

市民達は大急ぎで車へと向かう。

龍太は破壊される、育った街を眺めながらゆっくり、ゆっくりと車へ乗った。

ナルガクルガとラギアクルスの争いは激しさを増し、街はほぼ瓦礫で埋め尽くされた。

結果的に、ナルガクルガが逃げ出し、ラギアクルスの勝利という形で争いは幕を閉じた。

たちまち、ジャギイ達が街へやってきて、獲物を求めて彷徨い始めた。

彼らがここで築いてゆく生態系は、どのような物になるのだろうか。

『侵蝕』

モンスターは所構わず現れる。

建物の中、町中、はたまた山や森の中でも、いつでも脅威はすぐそこにあるという事だ。

イレギオンズの入隊を国民に勧めているが、一向に入隊する者は現れない。

それどころか、モンスターに殺される隊員が増えるばかりだ。

絶望——そう言うしかない状況に置かれているという事を、国民全員は着々と気づいてきていた。

「はあっ…はあっ…」

今にも涙が溢れそうな少女が、木々が生い茂る道路をひたすら走っていた。

『坂月 成美』茶髪をポニーテールで束ねた、平凡な中学生だったが、下校途中でモンスターに襲われ、山中へ追い込まれた。

気が動転した彼女は、とにかくモンスターが追ってこない場所へ逃げていた。

「嫌だっ…嫌だ！死にたく…死にたくない！」

可愛らしいストラップの付いた鞆を抱きかかえ、息を荒くしてとにかく走る。

すると、目の前の一軒家の影から、一頭のモンスターが現れる。

“ティガレックス” 本来なら、虎を連想させる黄土色の革で身を包み、翼脚を駆使して力の限り暴れまわるモンスターだ。

しかし、その黄土色は黒く変色し、全身から漆黒の靄を放っている。赤く不気味に発光する眼が、成美を捉える。

“ギヤアアアアアアアアアアアアアアアア”

甲高い咆哮をし、大きく口を開き突進してくる。

成美はすぐに近くに停まってある車の影に隠れる。

勢い良く突進したティガレックスはそのまま真っ直ぐ過ぎ去って

いった。

今のうちにと、成美はまた走り出す。

「なんでっ…なんでこんなにモンスターが多いの…?」

ついに走りながら泣き出してしまった。

またモンスターの影が見える。

桃色の体毛で覆われ、不良のようなトサカを持つゴリラのようなモンスター『ババコンガ』

しかし、その桃色の体毛も黒く濁り、漆黒の靄を放っていた。

“グアアアアアアアアア”

ババコンガは大きく口を開けて襲いかかってくる。

成美は泣きながらババコンガの横に回り込み、トンネルの奥に逃げ込んだ。

「もう…もう嫌だよ…」

成美は薄暗いトンネルの隅で、涙を零しながら泣いていた。

ただ家に帰るだけだったのに、モンスターに襲われ、さらにはこんな山奥に迷い込んでしまったのだから。

「ひっ…」

目の前に脅威が通り過ぎて、成美は口を押さえて息を殺す。

黒い靄を纏い、暗闇に溶け込んだ身体を持つモンスター。

背中から生えた身体を覆う2枚の翼、目が無い不気味な顔。

『ゴア・マガラ』 その名も姿も、誰も知らない。

成美を襲い、山奥まで追い込んだモンスターだ。

殺される そう確信した。

しかし、暗闇に塗れてよく見えないのか、それとも成美に興味が無いのかは定かでは無いが、そのままゴア・マガラは通り過ぎていった。

成美は奴に気づかれないよう、そっとトンネルを抜け出した。

「とにかく…一旦家に帰らないと…」

今の時代、防犯対策も兼ねて中学はスマホ持ち込み

OKの為、持っていたスマホで現在地を調べた。

然程家からは遠くない、山さえ降りれば、すぐに辿り着ける。問題は、モンスターに襲われない、安全な道から降りれるかどうかだ。

モンスターを街に連れて帰れば大惨事となる。

「…迷うのは駄目…探すしかない。」

そう自分に言い聞かせ、成美は歩き出す。

モンスターが出たからか、人の姿が見えない。

——と、その時。彼女の目の前に転がっていたのは、人の死骸だった。

悲鳴を上げて崩れるように尻もちをつく。

眼球は赤く、肌は黒み掛かっていた。

その変死体に、彼女は吐き気がこみ上げてきたが、ぐつと堪えた。

「気をしっかり…私…！」

成美はゆつくりと立ち上がり、頬を2回叩いた。

そこら中に、変死体が転がっている。

人が全くない原因は恐らくこれだろう。

何度か吐きながら、成美は地獄への道かのような道路を進み続ける。

ようやく死体が道に転がらなくなった所で、坂道が見えた。

「やった…！私…帰れるんだ…！」

闇雲にでも動いた甲斐があった。

喜んで少し駆け足になったその時——

木々をなぎ倒しながら、感染したババコンガが吹き飛んできたのだ。

成美は思わずしゃがんだ。

ババコンガはティガレックスに飛びかかり、激しく争い合う。

揺れにより、成美は足を踏み外し、坂道を転げ落ちてしまった。

街まで転げ落ちた成美を追いかけたティガレックスが、街ゆく人々を襲い始める。

予想していた、最悪の事態が起こってしまった。

さらにはババコング、ゴア・マガラさえも街への侵攻を開始し、街は一瞬で地獄と化した。

黒い靄が、街を一瞬で包み込み、空は瞬く間に曇る。

そんな中、とち狂った彼女の心に浮かんだのは、家族に会いたい、だった。

黒い靄が街を覆う中、彼女は自分の自宅を求めて走り続ける。

「ティガレックス、ババコングを発見。攻撃体勢に移ります。」

「君！どこへ行くんだ！避難所はこっちだぞ！」

イレギオンの隊員が呼びかけても、成美は家を求めて走るのをやめなかった。

イレギオンズとモンスターの戦いは長引いている。

それもイレギオンズの優勢で。

「ババコング、駆除完了。」

ババコングが弱々しく倒れて、ピクリとも動かなくなる。

ついに人間は、モンスターを倒せる程の力を入れたのだ。

ティガレックスも既に瀕死状態に入った時、天空からゴア・マガラが降り立った。

「何だ?!このモンスターは?!」

見た事もないモンスターに、イレギオンズは困惑し、一気に戦況が劣勢化する。

尻尾で吹き飛ばされて、噛み砕かれ、さらにはその翼脚で叩き潰された。

あつという間にイレギオンズは壊滅し、ティガレックスに捕食されていく。

ゴア・マガラが咆哮を上げると、紫の禍々しい角が生え、より一層、靄が濃くなる。

「お母さん！お父さん！」

マンションについた彼女は、必死に両親の名を呼ぶ。

部屋に入り、両親を探す。

「おか——」

ようやく見つけたと思えば、もう両親は生きてはいなかった。立ったまま、肌が変色し、赤い眼球を見開いたまま死んでいる両親の姿が、リビングにはあった。

成美は絶望し、その場に崩れる。

ゴア・マガラがマンシヨンの屋上に降り立ち、何かを始める。

黒き皮が剥がれていき、白銀の甲殻がちらつく。

全ての黒が剥がれ落ちた時、全身が白銀のモンスター「ジャガルマガラ」が、誕生した。

もう、その街に太陽の陽が差す事は、二度と無かった。

『風炎』

日本に残された土地はもう少ない。殆どの地域が、モンスターの地と化し、人口は大幅に激減した。政府は早めの対策として、4年の月日を掛けて人工島「バンギルガ」を日本から少し離れた所に設立した。

人工島 バンギルガ 日本人が多く集まる島。4年という短い期間で人工島と呼べる物が作れるのだから、技術が発展したものである。

バンギルガには、イレギオンズの兵舎が多数存在し、残った土地を守る為に日々戦っている。

「千葉県にモンスターが出現、援護をしに行く。直ちに出勤準備をしろ！」

隊長の声が隊舎に木霊する。

マグカップのコーヒを啜っていた青年が、ため息を付きながら隊服を身に着けていく。

「クソッ…いつになったらあいつらは消え去る…」

『天宮 風希』^{あまみや かぜき} イレギオンズに所属する青年である。

愛する者をモンスターに奪われ、モンスターに対して恨みを持ってイレギオンズに入った。

彼は常々、モンスターが消える事を強く望んでいる。

キラアアサルトを背負い、必要な物資をポーチに詰め込んで船へと向かう。

乗り込んだ船は対モンスター用に製造された「レギオンR5」

撃ち込むと、しばらくしてから破裂する。『裂爆砲』が装備され、甲板にはタレットミニガンが配備されている。最終兵器として、船の先端に、かつてモンスターに有効だったと言われる『撃龍槍』をアレンジした兵器が取り付けられている。

今の日本の資材では、対モンスター用の戦艦はこれが限界だった。

出港したはいいものの、何やら天候が少し悪化してきた。

出港前は問題無しだったのに対し、空が段々と曇り、ポツポツと雨が降ってきた。

「何故だ…？…こんなにも急に悪天候になる事など…」

何となく嫌な予感がした。

それは、嵐で目的地に着けなくなる以上に、大変な事が起こる予感だった。

「グアアアアアアアアアアアア」

風を切り裂くような咆哮と共に、大雨となる。

大雨の粒を潜り抜け、モンスターが姿を表す。

黒銀色の甲殻で身を包み込み、二枚の大きな翼を持った龍。

「クシャルダオラ」 報告に間違いがなければ——奴は古龍だ。

「撃てッ——!!」

炸爆砲が一斉に放たれる。しかし、奴には傷一つ付けられなかった。

クシャルダオラは身体の周囲を風で護っており、その風により、炸爆砲が無効化されていた。

タレットミニガンを乱射する。

ミニガンの鉛玉は、クシャルダオラの鋼鉄の甲殻に着弾するも、無様に弾かれてしまう。

「なんだと…?!」

「やつには弾丸が効かない!!うわああああ!」

ついにクシャルダオラが船に乗り込んできた。船内が大きく揺れ、一部の隊員が荒れた海に吞まれてしまう。

「くっ…」

大砲もミニガンも効かないのなら、残された手は船の先端にある撃龍槍のみだった。しかし船の先端ということあってか、船内に乗り込まれては当てるのは困難だ。

「こっちだ!!化け物め!!」

風希はキラアサルトを乱射しながら憎しみを込めて叫んだ。クシャルダオラは首を向けるや否や、すぐに風希に飛びかかってくる。転がって避けながら銃を乱射し、船の先端に向かって走る。

「風希…よせっ！」

「仲間を助けるには…これしかないんです！」

「…撃龍槍！用意！」

風希は船から飛び降りた。同時にクシャルダオラも船の先端にやってきた。

縄を使つてなんとか船にぶら下がっているが、落ちたら死は免れないだろう。

クシャルダオラが船から降り、飛来しながら風希に向かって突進した。

「撃ッッッ！！」

撃龍槍が作動した。その瞬間、赤い血しぶきと、破裂音と共に、クシャルダオラを撃龍槍が貫いた。風希は全速力でロープをよじ登り撃龍槍が直撃するのを免れた。

クシャルダオラは一瞬その場に留まったが、すぐに何処かへと姿を消した。

「風希!!なんて危険な真似を！」

「すいません…」

「でも良い。お前は無事だ。そして奴も撃退できた。」

隊長が彼の肩をポンポンと叩いた。仲間をかなり失ったが、それでも全滅は避けれた。風希は僅かな命を救ったのだ。

「今更引き換えせはしない。覚悟はいいな？」

残った隊員達は、静かに、一斉に頷いた。

霧に包まれた視界に、明かりが見えてくる。しかしそれは、希望の光では無く、絶望の“火”だった。

「街が…いや、大陸が燃えている…?」

まさに比喻するなら、地獄。街どころか、大陸全体が火の海と化し

ており、辛うじて道がある程度だった。

「まだ声が聞こえる。まだ助けを求める命がある。俺たちが最期にやるべき事は、それを救おうとする事だ。」

隊長を先頭にして、隊員達は炎の中をかいくぐって進む。

“ギイヤアアアアアアアアツ!!”

炎の海の上を飛来するのは、またもやモンスター。

王者のたてがみを持つ、炎の王。 “テオ・テスカトル”

「撃て!! 奴に少しでも損傷を与えるんだ!!」

隊員達は空を飛来するテオテスカトルに弾丸をお見舞いする。しかしテオテスカトルは怯む様子も無く、地上に降り立った。

さらに、隊員達の後ろにクシヤルダオラが舞い降りる。炎、風、雨。最悪な状況だった。

“ギイヤアアアアアアアアアツ!!”

“グアアアアアアアアアアアア!!”

テオテスカトルとクシヤルダオラは一斉に飛び、空中でぶつかり合う。クシヤルダオラの風のブレスがテスカトルに直撃、テスカトルも負けじとクシヤルダオラの甲殻を炎のブレスで焼いた。

「今のうちだ! 撃て! 撃ちま——」

空中に向かって弾を乱射する隊員達を、テスカトルとは比べ物にならないくらい火力の炎が骨の髄まで焼き尽くした。

空を飛ぶ黒い龍。闇に包まれたその姿は、2体の古龍をも、怯えさせる程だった。

『終始』

『東京や千葉を中心として、日本の大半が火の海と化しています。世界の終わりが近いのかもしれませんが。』

「世界の終わり…か。」

ジンオウガに襲われ、何とか生き残った美優。僅かに人がいるバンギルガの避難所の隅で裕二と一緒にラジオをただ聞いていた。

「俺たちが…何をしたんだろうな。」

「わからないよ。私たちは…何も、悪いことなんてしてないんだよ。」

絶望の淵にいる彼女らの前に、一人の男が立ち塞がった。赤い衣を纏った男。こんな状況にも関わらず、笑っている。

「外を見てご覧。」

男は避難所の窓を開ける。生温い風が、男の赤衣を泳がせた。

「人類よ、試練の時間だ。」

「はい…？」

「世界が炎の海と化した今、人間は絶望に打ちひしがれるしかない。」
「だがそんな中でも、人は生きようとする。形は違えど、皆戦い、抗うのだ。」

「さあ！私に人の希望と可能性を見せてくれたまえ！」

赤衣を纏った男は、避難所の外へ飛び出た。

「ちよ、ちよっと！」

美優が止めに行こうとした頃には、もう男はいなかった。

「何だったんだろう…」

「気もおかしくなるさ、美優。こんな状況だったら…」

「え…私のこと？」

日本に残された土地は、バンギルガのみ。残された人類はバンギル

ガで最終防衛体勢を整えた。

「そこのお二人さん。そろそろ移動だ。」

「移動…ですか。」

「この建物も、迎撃施設に改造しちまうらしい。」

バンギルガにある全てを懸けて、モンスターを撃退するらしい。奴らは日本にいる人間を殺し尽くしたあと、必ずここに来る。それを撃退できれば、少なくとも生きて明日を迎える事はできる。

裕二と美優。そして施設にいる生存者たちは多くの人々が集まる大型の避難所へ足を運んだ。

「お似合いなカップルさん。僕のおとぎ話でも聞かないかい？」

男がそう言ってきた。二人は微笑みながら頷く。

男はひと呼吸おいて話を始める。

『地が動き 緑は焼き尽くされ 小鳥の囀りも竜の雄叫びも絶え 日は失われ 古の災いは消え…全てを焼き尽くす者が現れる その者の名は “ミラボレアス” その者は黒き龍 叫べ 聞け 祈れ 命あるならば 天と地を覆い尽くす 彼の名を…』

男が淡々と話しているうちに、墓場になるであろう場所に辿り着いた。

「子供の頃、不思議に思ってたんだ。まさに今、その状況にそっくりだよ。」

「ありがとうね。子供を置いて逃げた、こんな哀れな男の話を聞いてくれて。」

「いえ。大丈夫ですよ。」

男は笑うと同時に、白い息を吐いた。

“ミラボレアス” それが日本を焼き尽くしているのだとすれば、おとぎ話の通りになってしまうとすれば、命ある限り叫び、聞き—— 祈らなければならない。

灼熱の炎に包まれている東京。未だ大勢のイレギオンズがモンス

ターを食い止める為に戦っている。

「ランチャー用意!!撃!!」

ロケットランチャーの弾が赤き竜 火竜 “リオレウス” に向けて放たれた。直撃すると、リオレウスは静かに横たわった。

「何頭いるんだ…キリがないぞ。」

「隊長!!奴です…!!奴が来てしまいました!!」

「奴…?」

イレギオンズの前に立ちはだかったのは、黒き棘を持つ悪魔 滅尽龍 “ネルギガンテ” だった。

「こいつが…!ネルギガンテ…」

“グオオオオオオオオオ!!”

ネルギガンテは手前にいた隊員を踏みつぶし、尻尾を使って建物を崩して瓦礫を降らせた。翼を地面に擦りつけたかと思えば、禍々しい棘が隊員達を貫いた。

「くっ…!!キラーランチャー用意!!」

ランチャーを構えた隊員が後方に下がり、肩にそれを担いだ。

「撃!!」

一斉に弾が放たれ、ネルギガンテに命中した。一瞬怯み、のけぞったがすぐに体勢を立て直し、退院たちを叩きつける。残された隊員たちは、キラーアサルトを放ち、逃げ回りながら攻撃を仕掛ける。

“グオオオオオオオオオ!!”

しばらく攻撃されたネルギガンテは、逆鱗に触れたかのように吠え、翼を羽ばたかせ飛び上がる。

そして地上へ向けて、一気に急降下する。ほとんどの隊員はネルギガンテに潰され、残された隊長もネルギガンテに叩き潰された。それからは、その灼熱の地で破壊の龍がただ雄叫びを上げていた。

「ランチャー隊…全滅確認…」

「…もう奴らは、止めようがないのか…」

上空を飛行するヘリコプター内は、絶望に包まれていた。次々に全

滅していく隊、モンスター達の討伐も徐々に難しくなっていた。モンスターを殲滅するのが目的として実施した全部隊投入だったが、水の泡になりつつある。残ってる部隊はたった一つ。東京は現状最も危険なエリアとして見られている。何にもヘリのレーダーが不調を起す程、強大な力を持った何か[〃]がいるのだから、残りの隊が終わるのも時間の問題だった。

「過去のおとぎ話にあった大地を焼き尽くす黒龍の話……まさか本当だったりしてな。」

「どうだろうな。何を言われても、何も感じなくなっちまった。」

ヘリの運転手は火の海を眺めながら言った。

「皆ああ!!どこにいるのおお!!」

一人のイレギオンズの女が、火に包まれたビル街で必死に叫んでいた。ヘルメットから溢れる黒の長髪。涙を浮かべる茶の瞳。容姿端麗な彼女は傷だらけで、右腕から大量の血を垂らしながら街をおぼつかない足取りで歩く。

「未来!!」

一人の男が彼女に向かって大声で叫ぶ。金髪に染めた彼は、未来と呼んだ彼女に駆け寄り、そっと抱き寄せた。

「零亜……痛いよ……」

「ああ……俺もだ。」

未来に零亜と呼ばれた彼の背中は、おぞましい傷があり、未来よりも多くの血を流していた。

「リオレウスが沢山いる。この傷も奴にやられた……」

「もう……隊は全滅だ。残ってる隊員は……俺とお前だけだ。」

彼の意識が段々と遠のいてきているのは、抱かれている彼女でも分かる。鼓動が次第に弱くなっていくのも感じる。

「毒が回ってきやがった……ハハ……最期はお前と、キスの一つでもしてから死にたかったな……」

「零亜…」

リオレウスの爪には毒が含まれている、当然爪により傷を付けられ
たら、その毒は体内に侵入し、やがて全てを蝕む。彼は今まさに毒が
身体を蝕んでいる最中だ。未来が彼に唇をゆっくりと近づける。零
亜の唇が間近に迫ったときには、息は無かった。未来は大声で泣い
た。今は亡骸となってしまった彼を抱きながら、炎の海の中で。

〃グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ〃

終末を伝えるおぞましい咆哮が、街中に響き渡る。未来の視界にい
るモンスター。奴は暗闇と同化している漆黒の鱗を纏い、大きな翼を
持ち、頭部には波打つように生えた4本の角がある。

その龍の名は 黒龍『ミラボレアス』終焉をもたらす龍だ。

「モンスター…お前たち…お前たちさえいなければ!!」

未来が放った弾丸は、ミラボレアスの禍々しい弾丸によって弾き飛
ばされる。古龍の甲殻すら貫くキラアサルトの弾丸、それが効かな
いならば半端な銃弾では傷一つ与えられないのだろう。零亜の亡骸
をそつと地面に置き、亡き兵士が残したランチャーを手に取る。弾丸
を装填してミラボレアスの頭に放つ。破裂したランチャーの弾は奴
の頭部にダメージを与えた。しかしミラボレアスは怯む様子も無く、
炎のブレスで地上を焼き払った。

「なんて火力…あんなのに焼かれたら…」

「…ッ！零亜!!」

間一髪で回避した未来は、焼かれた彼の亡骸に向かって叫ぶ。炎が
消える頃には、もうその姿は無かった。

「貴様あ!!」

ランチャーを再び構えた所で、彼女の意識は途切れた。ミラボレア
スが、未来を頭から喰らったからだ。彼女の首を飲み込み、さらにラ
ンチャーとキラアサルトも飲み込む。東京にいる全ての人間を殲

滅した黒龍。その禍々しい眼で海の向こうを眺める。翼を大きく広げ、咆哮し、終末の鐘を鳴らす。

そして、最後の人間が残るバンギルガへと飛び去っていった。

『終焉』

雲が赤みがかかった黒色へと変色していく。まさに終末。世界の終わりだった。

「裕二さん。私達…あの時、あんな風にじゃなくて、違う出会い方してれば、どうなってたと思う？」

美優は、微笑みながら彼に言った。裕二は照れながら口を開く。

「……美優さんと付き合ってた……かな」

予想外の反応に美優は顔を火照らした。

「も……もう！ 裕二さんったら……」

彼よりも照れる美優。裕二はそれを笑ってみていた。世界の終わりが近いかもしれないのに、避難所にいる人々は落ち着いた表情だ。今更喚いて抗っても無駄だと、皆思っているのだろう。

「さあ、これからどうするイレギオンズ……人類の可能性はこんな物ではない筈だ」

赤衣の男が避難所の中心に座り歯を見せて笑っていた。

「隊が……全滅だと？」

「はい。正体不明のモンスターは、仕留める事は疎かその姿を確認する事もできませんでした……」

帰還したヘリコプターの乗組員達は、イレギオンズ総司令官へ頭を下げた。残っているイレギオンズはほんの僅かしかない。これであのミラボレアスに対抗できるかと言われれば、無理があるだろう。

「もう……駄目なのか……こんな人数では、モンスターを退ける事すら……我々の負けだ……」

「司令官!! こんな所で諦めれば……! 死んだ仲間達はなんとと言うと思いますか?!」

一人の隊員が総司令官に詰め寄った。

「まだこの施設には撃龍槍があり、物資も戦える程には揃っています

!! 敵がどれだけ強大であろうとここまで来たなら、最後まで抗うべきです!!」

彼は全てを言い切ったあと、息を大きく吐いた。総司令官は彼の肩を持って静止する。

「……その通りだ。私が間違っていたよ。天宮^{あまみや}望^{のぞむ}” 隊員」

しばらく経って、司令官は彼にそう言った。

「総員、戦闘の準備を整えろ」

「ハッ!!」

「さあ、試練の時間だ。人類よ」

「この絶望的な状況下で、お前たちは何を選択する?」

「大人しく死ぬか、抗って死ぬか……幸いな事に選択肢は2つある。好きなほうを選ぶがいい」

赤衣の男が立ち上がって、美優の方を見ながら言ってくる。真剣な眼差しで彼女を見ている。黙っている訳にもいかなかったが、何を返せば良いのか分からなかった。

「答える。抗うか、抗わないか。答えは二つだ」

ついさっきまで離れていた男は瞬間的に美優の目の前に現れたかと思えば、すぐに消えた。

「どうした……?」

「え……あ、いや。別に何でもないよ。」

至近距離で話していたのにも関わらず、裕二にはあの声が聞こえなかったようだった。人生最初で最後の、狐に化かされた体験をした。

「総司令官!! 何か……何かがとてつもない速さで接近しています!!」

「ついに来たのか……」

赤い空を映し出す海の上を、黒き影が通り過ぎていく。影はバンギ

ルガの港で静止し、咆哮を上げた。

やがて、迎撃施設に黒龍 ミラボレアスがその姿を現した。

「奴が……」

「こいつが俺達の仲間を……」

イレギオンズの隊員達は圧巻した。その姿に、人類を焼き尽くすその龍の姿に。

「人類の全てを懸けて抗え!! 作戦開始!!」

総司令官の命を懸けた叫びと共に、イレギオンズの隊員達が一齐に動き始める。作戦の第一段階は、ミラボレアスの動きを拘束することから始めなければならない。迎撃施設には合計三つの撃龍槍が用意されてあるが、その内二つは使い捨てで、使えばすぐに壊れるであろう物だ。確実に当てれば、その分ダメージを与えられる。隊員達はアサルトライフルの弾丸を放ちながらミラボレアスを拘束装置へと誘導していく。拘束装置が作動すれば強固なワイヤーが対象を長時間拘束してくれる。最も、それが奴に効くかどうか別としてだ。

「こつちだ!!」

一人の隊員が手榴弾をミラボレアスへ向かって放り投げる。転がる手榴弾に連れられ、奴が拘束装置の設置場所へ移動した。

「ワイヤー!! 放て!!」

数本のワイヤーがミラボレアスを穿ち、やがてその動きを止めた。

「撃龍槍! 撃くく!!」

三本の撃龍槍が、ミラボレアスの胴体を深く突き刺した。血の雨が辺りに降り注ぎ、地面を紅く染め上げた。二本の槍は、ミラボレアスを貫いた瞬間に砕け散り、残された槍は残り一つとなってしまった。しかし、先程の攻撃でミラボレアスに多大な損傷を負わせる事には成功した。勝機は十分にある。

「作戦の第二段階に取りかかれ!!」

総司令官の言葉と共に、隊員達の動きが変わる。第2段階は複数の隊員が惹きつけている間に、配備されているたった一つのミニガンタレットを乱射する、といった内容だ。物資が限られているなかで、どれだけ与えられるダメージを与えられるかに人類の存亡が懸かって

いた。地上の隊員はアサルトライフルを撃ち続け、ミラボレアスの気を引く。その間、ミニガンの腕に自信のある隊員がタレットに搭乗し、標準を奴の頭部に合わせる。その瞬間、ミラボレアスが隊員に向かって炎のブレスを放った。隊員達は消し炭となり、標準に合わさっていた頭部も動いてしまった。

「クソッ……あの野郎」

隊員はミニガンを殴って歯を食いしばり、再び標準を覗く。

戦場から少し離れた避難所。そこからは最後の闘いがよく見える。

「あれが……ミラボレアス……」

美優は生唾を飲んだ。覚悟はできた筈だったが、あんな炎に焼き尽くされて死ぬのは、やはり恐ろしくてたまらない。身体が自然と震えてくる。恐怖と同時に、あの赤衣の男の言葉も思い浮かんだ。

『抗うか、抗わないか。答えは二つだ。』

抗うか、抗わないか。潔く死ぬか、最期の時まで悪あがきをするか。初めに言われた時は「抗わない」と答えそうになったが、今の彼女ならば「抗う」と答えるだろう。最期まで抗い、生きようとし続けるのが生命。自分も一つの生命として、抗おうと思えたからだ。

「美優さん……？　大丈夫？」

「……うん。大丈夫」

心配する彼の言葉に、彼女は笑顔で返してみせた。

何かの足音がする、地面を叩きつけるように力強く、小刻みに鳴る足音。それは次第に近くなっていき、消えたと思えば、避難所の屋根を破いて、巨大な何かの人々を踏み潰した。4足歩行で、全身を紫の鱗で覆い、首と頭部の付け根から髭のように鱗が伸びている。尻尾は全て鱗で覆い尽くされており、それは鋭く、返り血を浴びたかのように先端が紅く煮えたぎっている。口から炎を漏らしたそのモンス

ターは咆哮を上げる。

“ギアアアアアアアアアアアアアアアアアウウウ”

耳を劈く咆哮を聞いた途端、生き残った人々は建物から飛び出す。逃げ遅れた人に対し、尻尾の鱗を刃のようにして展開させ地面に思い切り叩きつけた。さらに、地面をえぐり取り、それに炎を纏わせ尻尾をぶつけて火球を放つ。直撃した人は無残な姿へと変えられてしまった。

「なんてモンスターなの……」

あまりに残酷なモンスターを前に、美優は棒立ちしてしまっていた。

「美優さん!!」

裕二が美優を押し突き飛ばす。美優が裕二の姿を見た頃には、彼の身体を、放たれた火球が砕いていた。

「裕二さん……!!」

身体を砕かれた彼を見て、一粒の涙を溢した。それ以上溢れるのを堪えて、全力で逃げる。しかし、モンスターはそれを逃がすはずもない。モンスターは再び火球を放った。美優は幾度となく見てきたイレギオンズの隊員を真似て、転がって回避を試みる。直撃は免れたが、完全に追い込まれてしまった。さらに火球が放たれる。美優にはその火球が遅く見え、決断の時間は十分にあつた。背後の海に辛うじて飛び込む。火花と水しぶきが同時に飛び交うと、そのモンスターは生き残った人間を始末しに駆けていった。

ミラボレアスは、圧倒的だった。全て順調に進んでいると思われた作戦も、今やイレギオンズが壊滅状態に追い込まれた事によって、遂行不可能になっている。瓦礫に足を挟まれた望が、アサルトライフルの銃口をミラボレアスに向ける。

「絶対に……諦めない。兄さんが繋いだこの命……絶対に……」

望はそう言い放つと、ミラボレアスの尻尾に叩きつけられて死んだ。最後の隊員だった。

「そう……か。私も、もう終わりなのか」

総司令は高台からゆっくり、ゆっくりと降り、ミラボレアスに近づく。

「皆の所へ行くとしよう」

司令官は、炎に包まれながらも安らかな顔で死んでいった。ついに、戦える者は誰もいなくなってしまった。

ミラボレアスは飛び立ち、紅く染まった空を舞う。日本列島は変わり果てている。道路はビルの残骸で埋め尽くされ、行き場を失った人間の亡骸が転がっている。自分が焼き尽くしたその大陸を見ながら、黒龍は何処か遠くへと飛び去っていった――

紅く染まった空が晴れ、陽の光が大陸を照らす。かつては人間が栄えたその地も、全てモンスターのものとなった。これからは、新たな生命が、その大地を創り上げていくのだろう。